

【第3回・東北遠征報告】

2011年の東日本大震災から5年が経ち、今回の東北遠征も3回目になりました。この東北遠征は、様々な思いを持って実施させていただいております。学生の中には2回目、3回目の経験者もおりますが、今回は6名の初めての一回生も参加してくれました。8月9日の朝に大学を出発し、10日の南相馬市でのボランティアのこともあり、福島県いわき市に入り一泊してから南相馬市に向けて翌朝早朝に出発いたしました。今回は、これまでとルートを少し変えて福島県浪江町を通ってお世話になる南相馬市ボランティアセンターに向かいました。浪江町は、先月まで避難指示が出ている地域でありましたが、ようやく7月12日から解除指示が出されたばかりでした。そんな浪江町ではありますが、まったく人の姿はなく、まさにゴースタウンの状況に学生たちも言葉を失っておりました。街が普通にありながら人がいないという現実に触れると、普段には感じる事ができない異様な空気が漂っておりました。南相馬市ボランティアセンターに到着すると、これまで何度もお世話になっております松本センター長にお出迎えをいただきました。5年以上が経ってもまだまだ人手が足りていないという事でもありましたし、これまでの本学の学生たちの活動状況も分かっていたので今回も非常に喜んでいただきました。事前に、「普通のボランティアの方ができないような力仕事を・・・」ということをお願いしておりましたので、昨年夏、今年3月に行った「竹の伐採」を予定していただきました。現場に着くと、松本センター長から訓示をいただき、また次の日から復興試合を行うということも伝えてありましたので「ケガのないように・・・」「試合に影響が出ないように・・・」とお気遣いをいただくお言葉をいただきました。今回の竹の伐採は、範囲も広い中で、まずは活動がしやすいように場所の整理整頓を行い、活動がスムーズに進むように場をつくる作業から行いました。早速学生たちが散らばってアツという間に活動を始められる状況を作っていました。活動も、誰が指示を出すこともなく、学生たちが積極的に率先して動き出してくれました。ただ危険も伴う作業だけに一人ひとりが周りにも目配りをしながら連携を取り合って作業を進めました。そういった状況、流れを見ても無駄がなく、野球の時以上の連携が自然の中で出来上がっていました。こういった場所に来ての学生たちの行動力には、毎年ながら驚かされます。また昼食は、今回も野球部をご支援いただいております「日本を美しくする会」が豪華なお弁当をご用意いただいておりますので、十分なエネルギー補給を行い学生たちも午後からの活動に向かうことができました。このように本学野球部の活動を陰ながらご支援、応援していただけることは本当にありがたい限りです。今回も活動予定時間(15時)を30分ほど延長しましたが、最後は「場を清める」ということで全員で次のボランティアの方々が入ってもやりやすいように整えて活動場所を後にしました。松本センター長に、活動のご報告をしてバスで石巻に向かったのですが、私たちが出発した後に今回の活動場所を見に行かれたようです。そして「一日で、あそこまでやってもらって本当に驚いたし、助かりました。学生さんたちへのお礼と、明日からの試合も頑張るようにお伝えください」とお電話までいただきました。活動後は、2時間半かけて石巻市女川町の宿舎に入りました。2011年の震災当時に鹿妻小学校(当時1200人が避難していた避難所)で、本部長として被災者たちのお世話をされておりました浅野仁美さんにご無理を言って宿舎まで来ていただき、学生たちにお話をさせていただきました。

浅野さんとは、2011年の震災後からのお付き合いで、本学での東日本復興支援チャリティ講演会にも来ていただいたこともある方です。東北遠征の際には、いつも我々の宿泊先まできていただきお話をさせていただいております。本学野球部の卒業生が東日本大震災後の復興支援活動に参加していた当時のお話や、東北の今の現状、浅野さんの思いを語っていただきました。学生たちもこの日の南相馬市でのボランティア活動の後だけに、浅野さんのお話もすごく心に響いているように感じました。私たちの思っていた現状と現実の差を感じながらも、学生たちにとりましては非常に貴重なお話を伺う時間となりました。初日の南相馬市での活動を終えて、2日目からは震災後3年目から始めました「復興試合」を、今回は石巻専修大学、常磐大学との2試合を行いました。また、私の中で東北に来た際には必ず学生たちを連れて行きたい大川小学校への移動時間も考え、この日は第一試合と第二試合にさせていただきました。大川小学校と言えば、東日本大震災の際、児童108名のうち74名が亡くなり、今も4名の子供たちが行方不明になっているところで、校舎が震災当時のまま保管されている場所でもあります。何度足を運んでも、その空気感には言葉が出ません。その大川小学校で当時小学6年生の娘さんを亡くされた佐藤敏郎先生(当時、女川の中学校で先生をされていた)にお願いをしましたところ、予定が入っていたにも関わらず、こちらの試合後の移動も考え16時に合わせて大川小学校に来ていただき、学生たちに当時の事や今の現状、親として、教師としての立場からの思いをお話いただきました。毎回、現地で聞かせていただく佐藤先生のお話にも心が痛むのですが、先生はこの現状をしっかりと受け止め、今後同じ辛いことが起こらないように伝えていくことが自分の使命だとも常々お話をされておられます。夕暮れ時でもあったのですが、現地には自身の子供さんを亡くされた遺族の方も来られていました。佐藤先生は、様々な方々に大川小学校がここにあったこと、子供たちがこの場で元気に遊び、学んでいたことを知っていただきたい、そしてこの場に足を運んでいただいた方々にはこの現実を感じていただき、それを伝えていただきたいという思いでお話をされておられます。その佐藤先生の強い思いを私たちは心で受け止め、決して風化させてはいけないという強い思いで現地を後にしました。3日目は、午後から東北福祉大学とのオープン戦のため仙台への移動がありましたが、仙台に入る前に、震災で街がすべてなくなってしまった門脇地区の門脇小学校に足を運びました。当時、この門脇小学校で校長先生をされていた鈴木洋子先生には東北遠征の数日前にお電話をさせていただき、門脇小学校の震災当時の事や今後の復興の事などを学生たちに聴かせていただきたいとお願いしましたところ、スケジュールを調整していただき早朝にも関わらず(7時半)門脇小学校の前でお話を聴かせていただくお約束をさせていただくことができました。少しでも早めに着いて鈴木先生をお迎えしようとして7時15分頃に着くと、鈴木先生はすでに現地に来ておられてバスを降りる我々を逆に迎えていただきました。その後、門脇小学校の前で震災当日の門脇の現状や避難状況、今後の門脇地区のことなどをお話いただきました。前日に行った大川小学校は海から3.8キロ離れている中で多くの犠牲者が出たのですが、この門脇小学校は海から800mしか離れていないにも関わらず、日々の避難訓練と同じように裏山(日和山)に避難しなくなった生徒はほとんどいなかったと伺いました。ただ津波の影響で、車や瓦礫が校舎にぶつかって炎上し、校舎は焼けこげた状態でありましたし、地震発生前にすでに下校していた生徒の何名かは亡くなったそうです。そして、今でも門脇小学校を今後のために残すという意見と、この場に残すこと自体が辛いので解体してほしいという意見があるよ

う で、今後どのようになっていくかは現段階では決まっていないう事もお話いただきました。この門脇地区も道路が整備され、復興住宅が経ち始めておりました。今年三月に入った時とはまた違った街の変化がありました。鈴木先生のお話を伺った後、予定の8時半に門脇地区を出て仙台に移動し、午後からは東北福祉 大学との試合をさせていただくことができました。今回の東北遠征では、復興試合をさせていただくことだけでなく、震災での被害を目の当たりにし、まだまだ復興には時間がかかる現実に触れ、学生たちもそれぞれの感じ方をしたようですし、今回何よりも、南相馬市ボランティアセンター・松本センター長、石巻の 浅野仁美さん、大川小学校をご案内いただいた佐藤敏郎先生、門脇小学校でお話を伺った鈴木洋子先生から、貴重なお話を聞かせていただきました内容はすべて に繋がるものがあり、心に響くものばかりでした。東北から帰阪する際のバスの中での体験発表では、野球の話はほとんど出てこず、今回の東北遠征での経験 と、ご縁をいただいた方々からのメッセージを心に刻み込む学生たちの姿がありました。7月の熊本への復興支援活動での経験、今回の東北での経験、すべては 人との出会い、つながり、ご縁の中でのものであります。そして、学生たちが自身の意志で足を運び、活動をし、その経験を今後の自身の人生に活かしてくれる ことが、今回東北でお世話になりました皆様の思いでもあると感じております。南相馬市ボランティアセンターの壁には、「できる人ができる時に できることをする」という文字が書かれてあります。これは決してボランティアだけではなく、日常の我々が大切にしていかなければならないことでもあると改めて 感じましたし、こういった東北の現状を決して風化させてはいけないうと強く感じました。また、今回も2名の近鉄バスの運転手さんにハンドルを握っていただき無事に戻ってくることができました。毎回ハンドルを握っていただける渡辺さんは、すべての行程を事前に考え、少しでも学生たちに負担がかからないように 見えないうところでご配慮していただいております。すべてが時間通りに進み、中身の濃い遠征ができましたのもこういった方々のご尽力あつてのことだと感じて おります。そして、「学生さんが、時間をすべて守って行動していただき、道具の積み込みなども協力してスムーズにさせていただいたお陰です」ということも 言っていました。当たり前のことですが、その当たり前のことを、学年関係なく学生たちがしっかりと行動で示してくれたことですべての流れが我々の動きやすいようになっていきましたし、普段はお忙しくされていて時間を取っていただけない東北の方々にも、不思議なくらいタイミングよく貴重なお話を伺う機会を作っていただきましたことは学生にとりまして正に生きた教材でもありました。そして関西一東北と遠く離れていても、被災地に心を寄せ続けることの大切 さを感じましたし、辛い経験をされた東北の方々が本学野球部員の成長をいつも応援していただいていることを改めてお話を通して感じさせていただきました。最後になりましたが、今回の東北遠征に際し、保護者各位には多大なるご理解とご協力を賜りましたことに対し、心より感謝、御礼申し上げます。

大阪産業大学硬式野球部

監督 宮崎正志